

平安の天文家 空海・清明・定家をめぐって

作花一志（京都情報大学院大学）

先ほど柴田先生はアカデミックなお話をされましたのが、私の話はかなりのまゆつばもので、100%信じていただいても、その責任は負えませんので、よろしくお願いいたします。

京都大学で天文学が始まってから100年、花山天文台がオープンしてから80年ですが、京都の天文学は実は1,000年の歴史があるということを知っていただきたいと思います。平安時代の京都は世界有数の文化都市で、源氏物語や枕草子など文学だけでなく、多数の天文の記録が残っています。その中には彗星、超新星出現も含まれています。これからのお話では、常識ではおよそ天文学とは関係ないと思われる空海、清明、定家の3人を取り上げてみます。



空海（774～835）

（イラスト提供：西岡季美）

弘法大師あるいはお大師さんとして親しまれています。真言宗の開祖で、東寺・高野山を創建し、書の達人として嵯峨上皇のお友達、諸国を回って土木工事の指導をしたり温泉も見つけるという平安初期の快僧（怪僧）ですね。とにかくすごい天才で、唐へ留学しましたが20年の留学期間を2年ですべて学び取り、多数の経文を持って帰国したそうです。彼が持ち帰ったものは真言密教だけではなく、曜日や星占いも含まれています。わが国に曜日をもたらした者は明治のヨーロッパ人でも、戦国時代のキリシタン宣教師でもなく、実は1,200年前の留学僧空海なのです。曜日が記載されている有名な例は藤原道長の日記『御堂関白記』で、

長保六年二月十九日(ユリウス暦で 1004 年 3 月 12 日)に道長は 84 歳の安倍晴明を伴って新しく作る法華三昧堂の土地探しに宇治木幡に行きますが、その日は癸酉の日曜日ということが記載され、実際計算で確かめられます[1]。これについて詳しい解説や星占いについての記事があすとろん第 2 号[2]に載っていますのでぜひお読みください。

安倍晴明(921~1005)

平安中期の陰陽師、安倍晴明は陰陽寮に務める天文博士で、決して妖術師ではありません。紫式部や清少納言と同時代ですから、どこかで会っていたかもしれません。彼の役職である天文博士とは太政官のれつきとした役職で、彼は政府の中級官僚なのです。もちろん占いもしますが、主な任務は天変の観測とその記録です。なぜ天変を観測するかといいますと、当時は天文現象は天の警告であると考えられていたからです。例えば日食が起こる、これは今の政治がうまくいっていないから天が怒って、そのような警告をしているのだというのです。日食による恩赦や彗星出現による改元などは実際に行われています。

『大鏡』には寛和二年六月二十二日(986年7月 31 日)の深夜、彼が花山天皇の退位を暗示する天変を見たときと書かれています。右は高校の国語の教科書に載っている有名な文章です。この短い文章から当日の天変の実態を探ってみると、木星がてんびん座 α 星へ異常接近したこと、またはすばるが月に隠されたこと、という 2 つの可能性が考えられます。ベテラン観測家である晴明は前もって知っていたのではないかと推測でき、さらにそこから藤原兼家・道長父子に密着した晴明の姿が浮かび上がって来ます[3]。

帝
お
り
き
せ
た
ま
ふ
と
見
ゆ
る
天
変
あ
り
つ
る
が
す
で
に
な
り
に
け
り
と
見
ゆ
る
か
な
・
・
・

また 989 年の夏の彗星出現については非常に客観的な報告書が朝廷に提出されています。実はこの彗星はハレー彗星で、軌道要素はわかっていますから PC で再現できて、8 月 16 日の早朝、金星とハレー彗星が東の空に見えたことになります。この時の記録は中国と日本だけで、ヨーロッパにはありません。

晴明について 2 つの事件は講演会では詳しく話しましたが、p25 の記事と重複するので、そちらをお読みください。

藤原定家（1162～1241）

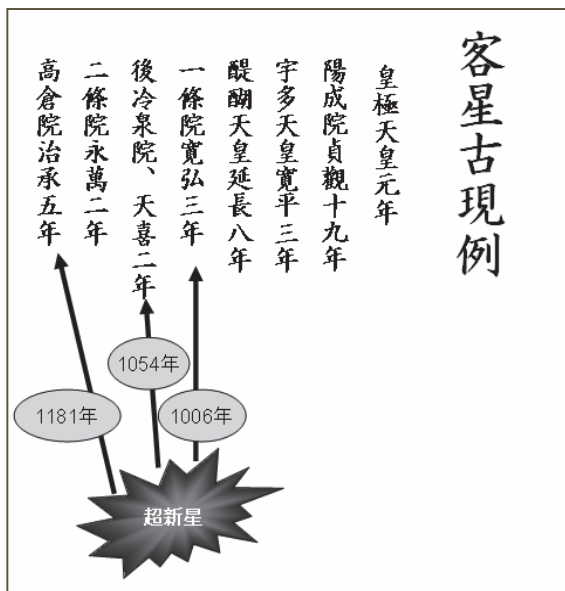
平安末期の源平時代から鎌倉初期の歌人で『百人一首』や『新古今和歌集』の選者として有名ですが、『明月記』という日記風のエッセイを著しています。その中には日常的な記事が多いですが、天文記録がたくさん集められています。特に客星、不意に現れるお客さん星という意味ですが、の出現記録についての記事は重要です。7世紀から12世紀まで全部で8回ありますが、すべて陰陽師・安倍泰

俊からきいた古い記録を書きとめたもので、定家自身の観測ではありません。

天喜二年（1054年）の夏に急に明るい星が現れ、木星くらいに輝いたそうです[4]。実はこの現象は重量級の星が最後に自爆を起して死ぬときに一夜にして数万倍も明るくなる「超新星爆発」なのです。現在、私たちはこの爆発の名残を「かに星雲」として見えています。この星雲は電波赤外線可視光線紫外線X線γ線さらにニュートリノとあらゆるエネルギーを放出し、パルサー（中性子星）を含み、毎秒1500kmの超高速で膨張している20世紀後半の花形天体です。

これは爆発当時の記録で、非常に貴重な天文資料です。20世紀になってこの記録がクローズアップされ定家は天文研究者の間で有名になりました。中国（北宋）にはもっと詳しい記載がありますが、ヨーロッパにはありません。ヨーロッパには当時まだ紙が伝わって来ていなく、記録技術が遅れていたせいではないかと思われま。まさか～と曇っていたということはないでしょうから。

また寛弘三年（1006年）の春、南の低い空に出現した大客星は、半月くらい明るく輝いたようで、日月を除けば人類観測史上最も明るい天体です。『明月記』の他にも複数の公家の日記に記載されていて、またエジプトやスイスにも記録があるそうです。今日、おおかみ座超新星と言われるもので可視光では非常に淡いで



すが、X線では非常に高エネルギーで輝いています。2006年に出現千年を記念してX線天文衛星あすかが観測しています[5]。

定家自身はどれだけ天文に関心があったかわかりませんが、超新星出現の記録が3個もある書物は他にないでしょう。

通常この3人は天文家とは思われていませんが、天文学へ貢献していることは確かです。Kukai, Seimei, Teika という名の小惑星がありますが、もちろんこの3人にちなむものです。小さいながらも地球や火星と同じく太陽の周りを回っています。その周期は約5年、またサイズは1kmくらいなものです。今夜Kukai はしし座に、Seimei はてんびん

座に、またTeikaはみずがめ座にいるはずで、2005年7月には「かに星雲」のそばを通りました。大望遠鏡でないと見えませんが、ご覧になった時には3人を偲んでほしいと思います。

以上は講演内容を抜粋編集したものです。

参考文献

- [1]作花一志 <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/koyomi/youbi.htm>
- [2]臼井正 『あすとろん』 No.2 p.24, 2008
- [3]作花一志 <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/seimei/seimei1.htm>
- [4]福江純 『歴史を揺るがした星々』 p.43, 恒星社厚生閣, 2006
- [5]小山勝二 『天文教育』 Vol.18, No.5, p.6,2006

